

「実践記録」から「研究論文」へ

— 学校に埋もれている豊かな研究の土壌を生かすために —

審査委員長
菊池 龍三郎

今年度は、全部で81篇の応募がありました。全体を通しての印象を言えば、最優秀論文をはじめとして優秀論文、優良論文はもとより、惜しくも選外になった研究論文も含めて、力作や労作が多かったことは事実です。とにかく頑張った研究、努力した研究が多かったと思います。言うまでもなく研究の完成度は、それにどれくらい時間を費やしたかによるところが少なくないことから、応募された先生方が多忙な中を時間をつくって研究を仕上げられたことに審査委員一同心から敬意を表したいと思います。私は、今回はじめて審査に加わったのですが、考えさせられたことや啓発されたことが多く勉強になりましたが、何よりも本県の教育に力強い希望を感じ取ることができました。

次に、今年度の審査の中で出てきたいくつかの重要な論点の中から次の一点だけ取り上げ、少し立ち入って述べ、講評に代えたいと思います。

それは、実践記録と研究論文の関係についてです。教育現場には、沢山の実践記録という「宝の山」があり、それをもっと活かしてどしどし研究論文として欲しいと願うからです。

1. 両者の関係をどう考えるか

今年度も、研究論文というよりもむしろ実践記録と言った方が適切と思われるものがいくつかありました。研究論文と実践記録は同じく教育実践から生まれますが、両者をはっきりと区別することは難しいと思います。しかし、実践記録が研究論文の土台であることは確かです。生産的な実践記録は、少しの工夫でいい研究論文になることができます。研究論文を書くことを目的に最初から研究に取り組む人は少ないと思いますから、物事の順序から言っても、色々な機会や場面に実践記録を書いた経験がもとになって、そこからさらに、あるところをもっと突っ込んで明らかにしてみたいという問題意識が強まって研究が始まるのだと思います。実践記録は研究の土台であり前段階、逆に研究論文を書くことは実践記録の発展であり深化であると位置づけてよいと思います。

2. 「研究」と「研究論文」について

実践記録を作成する中で大きくなってきた先生方の問題意識が研究上の課題意識に絞り込まれ、関連する著作物を集め、先行研究を探し、それを読み進めることで自分の問題が新たな意味を与えられたり、反対に自分では問題であってもすでに他の誰かが取り上げていて相当研究が進んでいることも分かったりします。そうした過程を経て次第に何を明らかにしたいのかが絞られていきます。分からないことが沢山あっても、その中で今の自分にとって最も大事なことに絞り込みます。この段階は大変重要だと思います。よく研究テーマを絞り込むとか、研究の間口を狭くすると言われるのはこのことを指しているのだと思います。

例えば、研究では、ごく単純化して言えば、あることがらを引き起こしている原因は何か、何が原因となって、あるいはどういう仕組みや働きによってその結果が生じているのかという因果関係を明らかにしたり、また、ある目的を達成するのにどのような手段・方法が最適かといった目的と手段・方法の関係を明らかにするという研究もあります。ただ、研究においては、明らかにしようとする対象を限定し、また研究の方法として共通に認められている方法が使われます。さらに、研究の進め方にも広く認められたルールがありますし、もちろん論文の書き方にも一定の順序や約束事

があります。例えば、自然科学の分野では、よくIMRAD（イムラド）（導入（Introduction）、研究方法（Methods）、実験結果（Results）、及び（And）、考察（Discussion））と呼ばれる順序に従って、研究を進めたり論文を書くことが多いと思います。これは共通のルール、共通の言葉、何よりも自分がやったことを誰でも後から検証できるように過程や手続きを共通にし、研究にとって最も大事な「客観性」を保証するためです。こうすれば本当の意味での研究の蓄積が可能になります。もちろん私達の教育研究が必ずしもこれに従う必要はないし、むしろ当てはめることが難しい分野も多いと考えます。ただ、このことを言うのは、多くの先生方がもっと実りある研究交流を図るためにも、研究会や講習会を数多く開くだけでなく、実践や研究の交流におけるルールの共通化を、特に用語や手続きや方法などの共通化を図ることが大事だということを言いたいためです。

3. 目的、性格、信頼性の比較

さて、研究論文と実践記録とは、取り組みの目的が少し異なると思います。実践記録は、例えば学校全体で共通に関心のあるテーマや、先生方が個人的に抱えている課題などについて、学校全体あるいは個人で、試行的な実践に取り組んだ場合、何をどのようにしたら良かったのかという実践の過程と成果を、学校や自分の指導の改善のためだけでなく、広く関心を同じくする関係者に情報提供したり問題提起したりするために作成するものです。したがって、特に外部への公表を想定している場合には、ある程度の速報性が求められます。たとえば、学校全体で委託研究に取り組んだ結果の実践記録、実践報告が、委託研究の終了後何年も経ってから公にされたというのでは実践記録を作成した意義も失われてしまいます。

それから実践記録は、研究論文と比べて実践についての論述の仕方が違います。実践記録は、取り組んだ実践によって目的がどう達成されたかを述べる点では研究論文と同じですが、実践記録の場合は特に、他の学校や後を追う先生方が同じことに取り組む場合の参考にならなければなりません。実践の参考になるということは、そこに後を追う人達への様々のきめ細かな助言や留意点、反省点や課題が沢山含まれていることだと思います。その意味でも、記録としてのある程度の分量が求められると思います。内容的には、自画自賛的な実践記録よりも、限定的な成果と多くの明確な反省点や課題がしっかり含まれ、そこに参加した先生方の意欲や熱意が感じられ、他の学校の先生方に自分達も取り組んでみたいと思わせるような実践記録には大きな価値があると考えています。

さらに研究論文と違って実践記録では、結果を検証する観点や方法が相当異なります。研究論文では結果の信頼性が問われてきますから、後から検証可能なように研究の方法が明示され、結果を導き出した過程とそれに基づく考察が検証に耐えられるものである必要があります。研究全体を通して、また論文の作成過程全体を通して、いわば「方法的意識」とでも言うべきものが貫き、管理していると言えます。不要な対象をできるだけ消去し、考察を絞り込んでいくことが必要ですから、記録の仕方という観点から見れば「引き算的」とでも言ってよいでしょうか。

これに対して実践記録では、まだこれほどの検証は求められてはいないと思います。むしろ、他の学校や先生方による実践の継続やより突っ込んだ実践の発展への、さらにはこれを基にした研究への動機付けと問題提起、助言や留意点、反省点や課題を沢山含んでいることの方により意味があると考えます。前述したように、記録的な意味もあって分量も増えてきますから、喩えて言えば、こちらの方は、記録の仕方は「足し算的」と言ってもよいかと考えています。

なお、審査委員会では実践記録もまた研究と同じように扱い審査したつもりです。このような実践記録が学校現場には沢山眠っているはずで、これを何とか活かしたいと審査委員一同強く思ったところです。ただ、今後のためにあえて1点だけ付言すれば、実践記録の中でも特に共同で取り組んだ報告に関して、研究分担、執筆分担だけでも内部できちんと話し合い明確にすると、論旨がはっきりし、内容的にも過度な重複がなくなりすっきりして読み手に分かりやすいものになると考えられます。

長々と述べましたが、本年度この論文集に掲載された諸論文は、いずれもこれらのポイントをクリアしたものでした。とりわけ、最優秀論文に選ばれた紺野先生の研究は、もちろんまだいくつかの課題や問題点はあるものの、全体が明確な「方法的意識」によって貫かれた大変に優れた論文でした。この論文を始めとして本論文集に掲載された論文は、本県の教育現場で実践の改善向上に奮闘されている先生方に裨益するところが大変に大きいと確信しております。ぜひとも多くの先生方に参考にして頂きたいと願っております。